

文部科学省 平成29年度 私立大学研究ブランディング事業採択

「帝塚山プラットフォーム」の構築による 学際的「奈良学」研究の推進

実績報告書 (平成29年度～令和元年度)

「奈良まるごとキャンパス[®]」構想にもとづき、
産官学連携で「奈良学」研究を推進、奈良の活性化や創成をめざします。



学長挨拶



本学では平成29年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業に『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的『奈良学』研究の推進」が採択されました。本実績報告書は、本事業の3年間にわたる活動の成果を取りまとめたものです。

本学の掲げる「奈良学」は、学校法人帝塚山学園がかつて併置した帝塚山短期大学の名誉教授、故・青山茂氏が提唱された「奈良学」を受け継ぎ、奈良に存在する文化資産や観光資源を独自の視点で捉え直しながら、今日の時代に即した形で学際的に発展させることを目的としています。また、本来、人文科学的な手法で研究されることが多い奈良の歴史文化や観光資源の根底にあるものを「人と暮らし」と考え、奈良県唯一の総合大学としての強みを生かして、様々な学問分野から捉え直していく試みでもあります。青山茂氏は「奈良学」の研究手法について、巨視的な「鳥の目」で全体を俯瞰し、日本の歴史文化における奈良の位置づけを考えるとともに、微視的な「蟻の目」で人々を洞察し、奈良をとおして日本全体の歴史文化を考察する、と表現されています。これは、産官学連携だけではなく、産官学民の視点を失わずに研究することであると考えます。本学では、「実学の帝塚山大学」として培ってきた教育・研究力を生かして、奈良に住まう人々と密接に関わりながら、奈良の新たな魅力の創出に取り組んでいきたいと思います。今後も、本学は「奈良学」をキーワードとして、本学の教育、研究をより一層推進し、さらにその成果の地域・社会への還元に努めてまいります。

最後に、本事業に関わりご高配を賜りました関係各位に深く感謝し、今後ともより一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

帝塚山大学

学長 蓮花一己

目次

学長挨拶	1
事業計画の概要	3
事業取組（実績）	
■事業実施体制	9
■研究取組① 聖徳太子関連遺跡の研究	12
■研究取組② 内蒙古自治区の遼代皇帝陵出土品を手がかりとした正倉院宝物の研究	14
■研究取組③ 永野大造氏撮影のガラス乾板を手がかりとした奈良仏像史の研究	16
■研究取組④ 大和野菜の食品機能特性について	18
■研究取組⑤ 奈良晒の研究	20
■研究取組⑥ 五條市の歴史学的研究	22
■研究取組⑦ 民俗資料や聞き取り調査による奈良県内各地域の生活文化研究	24
■研究取組⑧ 奈良県北西部の山・里・川と人々の営みに関する総合的な歴史・文化研究	26
■シンポジウム・成果報告会・公開講座・展示	28
■奈良学ブックレットの発行	31
■奈良学関連資料の収集	32
■ブランディング戦略に対する指標	37
まとめ（外部評価委員の講評）	38

事業計画の概要

■事業名 「帝塚山プラットフォーム」の構築による学際的「奈良学」研究の推進

■申請タイプ タイプA

■支援期間 3年（平成29年度～令和元年度）

■事業概要

本事業では、奈良県全体を研究のフィールドとする本学独自の「奈良まるとキャンパス®」構想にもとづき、地域の拠点として「帝塚山プラットフォーム」を構築し、学際的な「奈良学」研究を推進する。「奈良学」は、奈良を研究対象とし、日本や世界における奈良の位置づけを明らかにするものである。産官学との連携による「奈良学」研究を通して地域の活性化や創生に取り組むことで、地域の拠点大学としてのブランドを確立する。



■事業目的

本事業の目的は、奈良県全体を研究のフィールドとする本学独自の「奈良まるごとキャンパス®」構想にもとづき「帝塚山プラットフォーム」を構築して学際的な「奈良学」研究を推進することで、奈良に存在する様々な文化資産や観光資源を再発見し、その成果を広く社会に発信していく取組を本学と地域が協働して行うことにより、地域の活性化と創生に結び付けることである。さらに、本取組を通じて、奈良県に立地し、地域の振興や情報発信の拠点としての重責を担う帝塚山大学の役割や存在をより明確なものとし、地域における独自性を本学の特色として打ち出すことで、本学のブランドの確立に結び付けていくことをめざす。本事業で推進する「奈良学」は、本学を設置する学校法人が併置していた帝塚山短期大学（平成12年度に本学組織に組み入れ）の名誉教授である故・青山茂氏が1980年代に提唱したもので、奈良を対象とした単なる「郷土史」や従来の「日本古代史」ではなく、巨視的な「鳥の目」で全体を俯瞰し、日本の歴史文化における奈良の位置づけを考えるとともに、微視的な「蟻の目」で人々を洞察し、奈良を通して日本全体の歴史文化を考察するというものである。つまり「奈良学」は、様々な世界遺産をはじめとする日本有数の文化遺産を有する奈良独自の地域性を明らかにし、そこから日本全体さらには世界へ、また逆に世界から日本へ、そして奈良へと視野を広げていく学際的な研究を意味する。奈良は、古代日本の中心地域としての側面と中世以降現代に至る日本の一地域としての両側面を有している。ローカルな視点に立脚し、グローバルな視野から世界を見ることが求められる現在、かつて日本文化の中心であり、グローバル都市であった奈良を研究のフィールドとすることに意味がある。また、奈良の地域振興、とりわけ観光分野の活性化においては、現在、奈良が最大の特色としている古代日本の文化遺産のみならず、今までは古代遺産の大きさに隠れ見過ごされがちであった中世から現代に至る特色的事象を再発見、再構築することで、今まで活用されることが少なかった観光コンテンツを実証的根拠にもとづき創出することが可能となる。本事業で構築する「帝塚山プラットフォーム」では、多くの学内関連機関や研究者・学生と外部のステークホルダーが、情報と人材を共有できる体制を準備する。本取組では、直接現地に出向き、産官学連携等の形態を通して「プロジェクト型学習」の手法を駆使し、奈良県唯一の総合大学という強みを生かして、歴史学、考古学、民俗学は言うに及ばず経済学、経営学、法学、心理学、建築学、食物学から教育学までを動員して奈良を総合的かつ学際的に研究する。

本事業は、「奈良学」について学際的な研究を行う「実証」と学際的協働による「実践・発信」の二つの側面から推進し、「帝塚山プラットフォーム」を構築する。そこで、本取組では、1)「文化財・祭事」、2)「食文化・伝統産業」、3)「地域・コミュニティ」という三つの領域を設定して事業を推進する。

【実証】 実証に関わる具体的な事業内容は三つの領域について、各々以下のような取組である。

1) 文化財・祭事

①聖徳太子関連遺跡の研究

奈良県生駒市・高山地区から出土した法隆寺の瓦を手がかりに、瓦窯（瓦を製造する窯）の位置と法隆寺との関係、聖徳太子関連遺跡との関連性について、発掘調査により明らかにする。本学附属博物館は日中韓の古代瓦約 7,500 点を所蔵する特色ある博物館で、本研究は古代瓦の分析についての研究実績にもとづき実施する。

②中国・内蒙古自治区の遼代皇帝陵出土品を手がかりとした正倉院宝物の研究

中国・内蒙古博物院との連携にもとづき遼代皇帝陵出土品と奈良の正倉院宝物との関連性を明らかにする。

③永野太造氏撮影のガラス乾板を手がかりとした奈良仏像史の研究

平成 27 年に本学は奈良の著名な仏像写真家・永野太造氏所蔵の奈良の仏像を撮影したガラス乾板（感光材料）約 7,000 枚の寄贈を受け、この整理・分析をもとに奈良の仏像史を明らかにする。

2) 食文化・伝統産業

④大和野菜の食物学的研究

奈良県において独特の栽培方法で生産されてきた「大和野菜」の食物学的特性を明らかにし、それらを原料とした商品開発により地域発展に資する研究を行う。

⑤奈良晒（さらし）の研究

本学は、他に類をみないおよそ 100 機の織物に関する機具を保有している。江戸時代に奈良の産業として栄え、現在も形をかえて生産されている、高級麻織物「奈良晒」について、理論と実践の両面から研究し、それを展開させ、成果を公表する。

3) 地域・コミュニティ

⑥五條市の歴史学的研究

奈良県五條市との連携協定にもとづき、建設途中で未完成となった産業遺産のひとつである、五條市と和歌山県新宮市を結ぶ五新鉄道を中心に、五條市の文化財や歴史遺産と連動させて観光資源としての活用可能性について研究する。

⑦民俗資料や聞き取り調査による奈良県内各地域の生活文化研究

天理市福住地区における明治・大正・昭和期の庶民の生活文化研究の実績をもとに奈良県内各地域の民俗研究を行う。

【実践・発信】 これら①～⑦の「実証」研究にもとづき、その成果を以下の取組として「実践・発信」し、広く国内外に情報発信し、「帝塚山プラットフォーム」の機能を充実させる。

4) 事業全体

本事業の研究成果を「奈良学」講座として公表するほか、学生や卒業生、地域住民に対する「奈良学」を活用した地域活性化の人材育成プログラムを展開する。また、附属博物館や図書館で事業全体の展示及びデジタル博物館の充実、公開講座、シンポジウム等を通して研究成果を広く公表する。

1) 文化財・祭事

文化財のデザイン等を活用して新たな商品を開発する。(①～③)

2) 食文化・伝統産業

明日香村等にて大和野菜の食物学的分析にもとづいた商品開発を行い、大和野菜のブランディングに資することをめざす(④)。また、奈良晒のデザイン開発や商品化を行う(⑤)。

3) 地域・コミュニティ

五條市やNPOとの連携により、産業遺産である五新鉄道等を観光資源として活用したイベント等を開催する(⑥)。奈良地域の生活史について小中学校やコミュニティで教育活動を行う(⑦)。

なお、平成30年度より、本事業の取組の中で、各研究の枠を越えた学際的な研究が推進され、3) 地域・コミュニティに以下の研究が追加された。

⑧奈良県北西部の山・里・川と人々の営みに関する総合的な歴史・文化研究

本学の存在する奈良県の北西部を中心とする地域の歴史や多様な文化遺産の学際的な調査・考察を通して、当該地域のさまざまな活動に学問的な基礎を提供することを目的とし、高山地域などの瓦（考古学）、神武東征説話・物部氏（古代史）、矢田寺など庶民信仰および造形文化資料（美術史）、斑鳩の民俗（民俗学）、古道の研究などを構成テーマとする。

■期待される研究成果

本学独自の総合的かつ学際的な「奈良学」研究を通して得られる成果として、次のことが期待される。

1)「文化財・祭事」について、①~③の取組は、いずれも学術的な新発見が大いに期待され、奈良の歴史文化に新たな事実が見出される内容である。

①に関して、法隆寺の瓦が出土した本学近隣の生駒市・高山地区は、従来最古とされてきた四天王寺よりも古い飛鳥時代の瓦窯の遺跡である可能性が高く、発掘によりそれが確認されれば新発見となり、法隆寺の歴史を考える上でも学問上重要な意味を持つ。

②に関して、本学の教授が内蒙古博物院の学術委員会委員に就任し、同博物院と本学との連携により、内蒙古の凍土から発見された良質な保存状態にある壁画や文物の調査研究を通して、8世紀に中国からもたらされた正倉院所蔵の文物との関連性を明らかにすることで、シルクロードを通じた文化交流の新たな事実の発見の可能性が高い。

③に関して、研究材料となるガラス乾板は、奈良の古寺における仏像の修復前の姿を記録したものを多く含み、仏像の修復前後を比較することで、奈良仏像史の新発見となる可能性が高い。

①~③の研究成果については、過去に事例のない内容が多く含まれるため、デジタルアーカイブ等を構築することで、情報を広く公開することも可能となり、歴史文化に関する学術研究の一層の進展も期待される。また この研究の成果により、奈良が大きく知られる契機ともなり、奈良の観光事業の促進に寄与することになる。

2)「食文化・伝統産業」について、④と⑤は地域の特産である大和野菜と奈良晒の幅広い普及に繋がるもので、地域のブランド化と活性化に繋がる内容である。

④に関して、大和野菜は、奈良県が平成17年10月から認定を始めたもので、奈良県の新たな観光資源を作るため、地元の特産品としてアピールすることで、奈良県の地域活性化に繋げるための方策の一つであり、本学としても大和野菜の「片平あかね」(赤かぶ)や「大和まな」を原料とした「大和ベジサイダー」を学内での研究を通じた産学連携で開発・商品化し、すでに約2万本を販売した実績を有している。また「片平あかね」の生産地である奈良県山添村片平地区の地域ブランディングにも

寄与してきた。今後の研究成果としての商品開発は、さらなる大和野菜のブランディングに寄与できると考える。

⑤に関して、本学では奈良の伝統織機である「大和機（やまとばた）」と「奈良晒」に関する研究を重ねており、それを「奈良学」の視点から多面的にとらえ直すことでさらなる広がりをもたせることができる。また、その成果にもとづく織物講座を「履修証明プログラム」として実施し、社会人への学び直しを推進する。

④⑤の研究成果については、地域の特産品としての認知拡大と商品化による販売促進の両面から、地域の活性化に大きく寄与することになる。

3)「**地域・コミュニティ**」について、⑥と⑦は新たな観光資源の発掘に繋がる内容である。

研究⑥とその実践・発信は、本学と連携する五條市の「五條市まち・ひと・しごと創生総合戦略」（平成 27 年 10 月）に明記された「地域資源(文化財、五新鉄道跡活用等)を活用した観光促進事業」に寄与し、同戦略にあげられた「五新鉄道跡活用事業数」の目標値(平成 31 年までに 3 件)はひとつの成果指標になる。また、奈良学研究推進委員会での点検・評価に加え、五條市や関連団体からの評価を受ける。

研究⑦とその実践・発信は、奈良県の文化資産の重要な側面である生活史であり、県内の市町村の民俗資料館との連携事業として、各種の催しの回数や参加者数が成果指標となる。

本事業は、複数の「実証」「実践・発信」の取組からなるが、それらが総体として帝塚山大学が提唱する「奈良学」というブランドを形成するとともに、地域の観光振興への貢献を通じて、奈良の歴史文化、経済・社会、文化等の発展等に寄与できるものとする。学際的「奈良学」研究の推進は、本学が標榜する「実学の帝塚山大学」を具現化するものである。

事業取組（実績）

■事業実施体制

・学内の実施体制

学際的「奈良学」研究を本学のブランディングの中核として再認識するとともに、学長のリーダーシップの下、学内諸部局が連携し全学的な事業実施体制を整備するため、次頁の図のとおり、学長、副学長、大学院研究科長、学部長、全学教育開発センター長、学科長、奈良学総合文化研究所長、事務局長を主たる構成員とする、「奈良学研究推進委員会」を本事業採択前より設置していた。同委員会は委員長である学長を中心に本事業推進の方針・計画を策定し、関連学部・学科・研究科・センター等に指示する。これを受けて、関連学部・学科・研究科・センター等は取組を推進するとともに、その進捗・成果を定期的に同委員会に報告するしくみを構築し、適切に事業の進捗管理を行う。

事業推進にあたって、研究活動の面においては、奈良学研究推進委員会を中心に既設の奈良学総合文化研究所、考古学研究所、附属博物館等と連携、情報共有を行う体制が本事業採択前より構築できていた。

事業の成果にもとづくブランディング戦略については、同委員会との緊密な連携のもと、既設の「広報委員会」や広報課が策定、推進している。本事業は地域との連携も重要な要素となっており、既設の「地域連携推進委員会」をはじめとした学内の諸部局との適切な連携により、事業を効果的に推進する体制を強固にする。

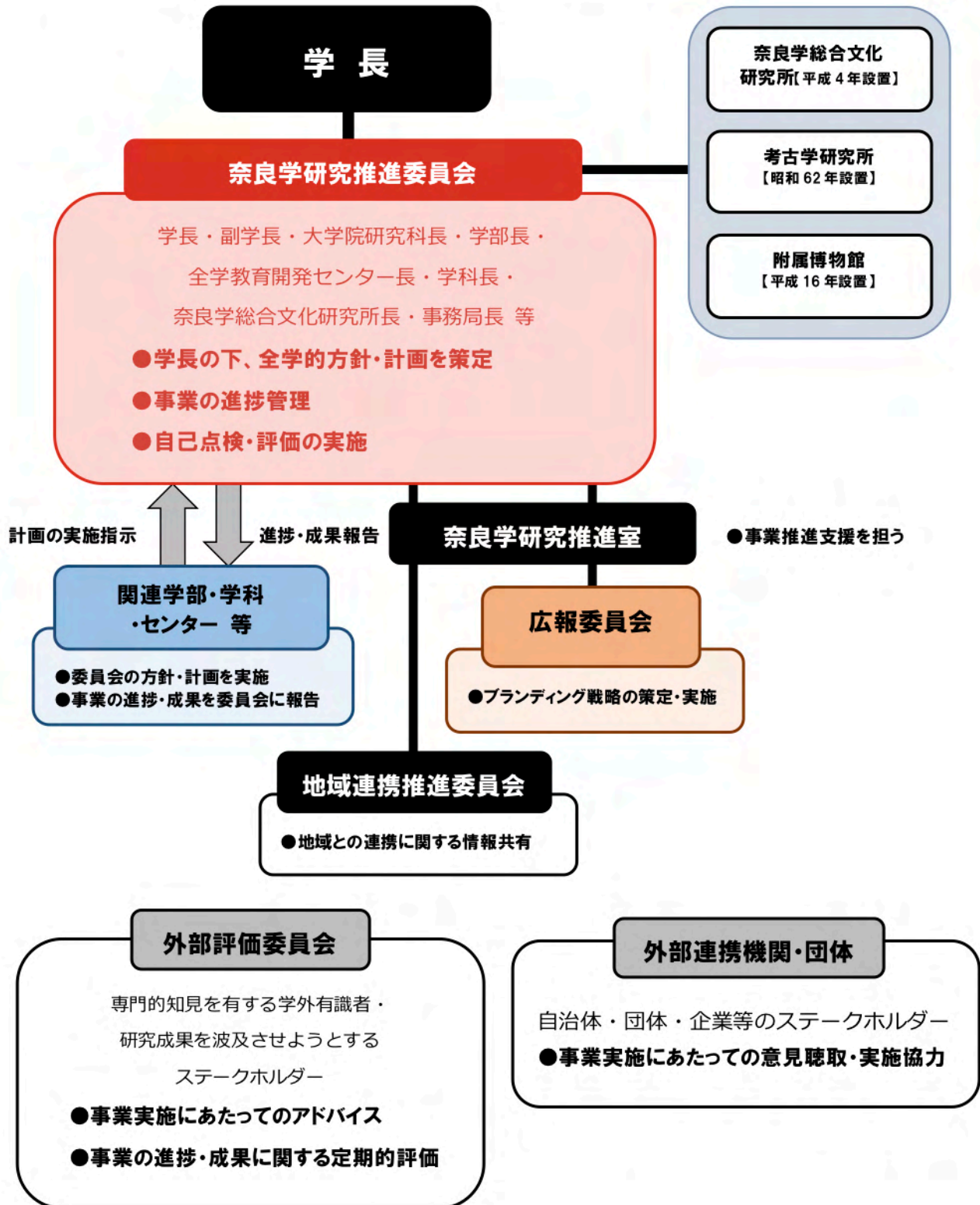
事業全体を支援する組織として各所とのコーディネートを行う「奈良学研究推進室」を設置し、事業の円滑な遂行を実現する。

これらの諸活動により抽出された効果や改善点については、①研究活動、②ブランディング戦略、さらに③事業全体の点検・評価のプロセスに取組、事業の推進に生かす。



奈良学研究推進室（東生駒キャンパス 1 号館 1 階）

学長主導による事業実施体制



・外部評価体制

本事業については、本事業採択前より本学がステークホルダーとして想定していた奈良県明日香村村長や生駒市観光協会会長等の外部連携機関・団体に対して、期待される研究成果およびその測定方法等を中心に意見聴取しており、事業推進にあたっても継続的に意見聴取と実施協力を得ている。また、研究成果を波及させようとするステークホルダーの代表者である先述の自治体、機関・団体のほか、奈良教育大学学長などからなる外部評価委員会を組織し、継続的なアドバイスを受けるとともに、事業の進捗・成果に関する定期的な評価を受けてきた。これらのアドバイスや評価結果から抽出された効果や改善点については、①研究活動、②ブランディング戦略、さらには③事業全体の点検・評価のプロセスに取り込み、事業の推進に生かす。

・外部評価委員

加藤 久雄 氏（奈良教育大学・学長）〔外部評価委員・委員長〕

森川 裕一 氏（明日香村・村長）〔外部評価委員〕

池田 英憲 氏（生駒市観光協会・会長）〔外部評価委員〕

・開催実績

第1回 外部評価委員会

日時：平成30年3月28日（水）16:00～17:30

場所：春日ホテル 会議室（奈良県奈良市登大路町40）

第2回 外部評価委員会

日時：平成31年3月18日（月）16:00～17:30

場所：春日ホテル 会議室（奈良県奈良市登大路町40）

第3回 外部評価委員会

日時：令和2年3月14日（土）11:00～12:15

場所：奈良春日野国際フォーラム 薔〜I・RA・KA〜 会議室（奈良市春日野町101）



■研究取組①

- 研究課題名 聖徳太子関連遺跡の研究
- 研究代表者所属・職・氏名 文学部・教授・清水昭博
- 研究協力者所属・職・氏名 東近江市埋蔵文化財センター・所長・杉浦隆支氏
城陽市歴史民俗資料館・学芸員・寺農織苑氏
- 学外研究協力機関・担当者 三郷町教育委員会・主査・大塚慎也氏
島本町教育委員会・学芸員・木村友紀氏

●研究内容・方法

聖徳太子は小学校の教科書にも登場する日本史上の有名な人物である。また、太子は斑鳩に宮殿をおくなど奈良に関わりの深い人物でもある。しかし、太子に関わる同時代史料は少なく、その業績については謎が多い。本研究では考古学の視点から聖徳太子の業績にアプローチする。奈良には法隆寺をはじめ太子に関連する寺院や遺跡が数多くある。そうしたなか、聖徳太子関連遺跡から出土する瓦などの遺物に注目し、その分析・調査をすることによって記録では知りえない聖徳太子の業績を解明する。

●研究実績

平成 29 年度には、法隆寺の瓦を生産した瓦窯（北倭村窯）の推定地である奈良県生駒市高山町で遺跡踏査を実施した。また、高山町と聖徳太子の関係を地元で普及すべく、地元で講演会を開催した。さらに、法隆寺をはじめとした古代瓦を普及すべく、滋賀県東近江市と共催で展示会、シンポジウム、体験講座などを開催した。平成 30 年度には法隆寺の瓦を生産した瓦窯（北垣内窯）の所在が推定される奈良県生駒郡三郷町勢野東で現地踏査を実施した。また、三郷町と共催で講演会、展示会、遺跡ウォークを実施した。さらに、法隆寺以降、地元で続く瓦づくりの歴史を探るべく、中宮寺出土瓦、生駒の近世瓦の調査を実施した。令和元年度には、法隆寺をはじめとした古代瓦を普及すべく、京都府城陽市歴史民俗資料館、大阪府島本町教育委員会と共催で展示会、シンポジウム、体験講座などを開催した。また、これまでの調査研究の成果をまとめ報告書を作成した。さらに、本研究の成果を一般に公表すべく、枚方市メセナひらかた、奈良春日野国際フォーラム、帝塚山大学で「聖徳太子関連遺跡の研究」に関連する講演を実施する予定であったが、新型コロナウイルスによる政府からのイベント自粛要請に基づき、中止となった。

●研究の記録（一部）

・東近江市能登川博物館・埋蔵文化財センター・帝塚山大学附属博物館の共催による展示「東近江の古代寺院とその源流 一東アジアからの道一」の開催（平成 30 年 11 月 14 日～12 月 23 日）

本展示では、古代、東近江の地に仏教が伝わったことを示す重要な証拠である東近江市内の宮井廃寺など 8 カ所の古代寺院から出土した瓦や塑像などの出土品とともに、本学附属博物館が所蔵する東アジアの古瓦や埴仏を合わせ展示することによって、東近江の古代寺院の源流を探した。また、11 月 24 日には、「東近江の古代寺院の源流を探る」と題し、能登川博物館にてシンポジウムを開催した。





・三郷町共催講演会「法隆寺の瓦を求めて～聖徳太子と古代の三郷～」の開催（平成 31 年 3 月 23 日）

三郷町と共催で、講演会「法隆寺の瓦を求めて～聖徳太子と古代の三郷～」を三郷町文化センターにて開催した。本講演会では、研究代表者の清水昭博教授が日本の屋根瓦について、どこで生まれて、どうやって日本へやって来たのか、そして、なぜ三郷町に伝わったのかを紹介した。また、同日・同会場にて、企画展示「ねえ、平隆寺って知ってる？一瓦でみる古代三郷の歴史～」を開催し、企画を担当した本学大学院生がわかりやすく解説した。

・講演会「聖徳太子と楠葉の瓦－聖徳太子関連遺跡の研究－」の開催（令和 2 年 2 月 29 日）【中止】

帝塚山大学考古学研究所主催の講演会「聖徳太子と楠葉の瓦－聖徳太子関連遺跡の研究－」を開催する予定であった。帝塚山大学考古学研究所では古代寺院や古代瓦を主なテーマとして研究活動を進めているが、今回の講演では、枚方市・楠葉平野山瓦窯から発見された古瓦から同窯と聖徳太子や法隆寺、四天王寺との関係に迫るものを予定していた。



●当該研究に関する実績（論文、発表、メディア掲載等）

- ・平成 30 年 2 月 「聖徳太子と高山を結ぶもの～北倭村山田発見の瓦～」(発表)、高山文化研究会
- ・平成 30 年 10 月 「瓦からみた法隆寺の歴史」(発表)、斑鳩の里観光ボランティアの会
- ・平成 30 年 11 月 「東近江の古代寺院とその源流」(展示・シンポジウム・講座)、能登川博物館
- ・平成 31 年 3 月 「法隆寺の瓦を求めて～聖徳太子と古代の三郷～」(発表)、三郷町文化センター
- ・平成 31 年 3 月 「ねえ、平隆寺って知ってる？一瓦でみる古代三郷の歴史～」(展示・解説)、三郷町文化センター
- ・平成 31 年 3 月 「平隆寺とその周辺の古代瓦窯を歩く」(遺跡ウォーク)、三郷町内
- ・令和元年 7 月 「自瓦自賛－瓦を解き明かす－」(展示・解説・イベント)、城陽市歴史民俗資料館
- ・令和元年 10 月 「鈴谷瓦窯跡と東大寺」(展示・講座・イベント)、島本町歴史文化資料館
- ・令和 2 年 2 月 「聖徳太子と楠葉の瓦－聖徳太子関連遺跡の研究－」(発表)、メセナひらかた【中止】
- ・令和 2 年 2 月 「聖徳太子と古代の三郷」『奈良学研究的の現在Ⅱ』帝塚山大学出版会
- ・令和 2 年 3 月 「聖徳太子関連の関野研究」(発表)、奈良春日野国際フォーラム【中止】
- ・令和 2 年 3 月 「聖徳太子と斑鳩」(発表)、帝塚山大学【中止】

■研究取組②

- 研究課題名 内蒙古自治区の遼代皇帝陵出土品を手がかりとした正倉院宝物の研究
- 研究代表者所属・職・氏名 文学部・教授・牟田口章人
- 研究協力者所属・職・氏名 文学部・教授・清水昭博
文学部・講師・戸花亜利州
- 学外研究協力機関・担当者 内蒙古博物院・院長・陳永志
関西学院大学・教授・河上繁樹

●研究内容・方法

平成 28 年から 3 年度に亘って研究代表者が獲得した科学研究費（基盤研究 C）により、中国内
蒙古博物院との共同研究は大きな進展を見せている。とりわけ中国北方の騎馬民族王朝・遼の第六
代皇帝の貴妃墓の遺品をはじめ日本の研究者がこれまで調査が叶わなかった資料の調査を現在行っ
ており、そこから同時代の日本との交流が見えてきた。この成果を本学において開催する日中共同
のシンポジウムを通じ広めよう、というものである。

●研究実績

平成 30 年度は前年度に引き続きポスト天平文化の敷衍をテーマに 10 世紀の遼時代の文化財を
内蒙古自治区フフホト市の内蒙古博物院及び内蒙古文物考古研究所で調査し、その成果を平成 31
年 2 月 17 日、奈良市の大和文華館にてシンポジウムを開催、報告した。本年度研究代表者を代表
とする調査団は遼王朝初期の英雄として知られる耶律羽之（890 年～941 年）墓出土の染織品と第
六代聖宗の最初の皇后とみられる蕭氏貴妃墓出土ガラス器を中心に調査を行った。その結果、遼墓
出土ガラス器が全てイラン以西の西アジアではなく中央アジア産であったことが明らかになったほ
か、これまでほとんど語られることがなかった平安文化と遼時代(916 年～1125 年)が唐草文様を
通じ、共通の環日本海文化とでもいうべき文化圏を築いていたことなどが具体例から報告され注目
された。

●研究の記録（一部）

・内蒙古考古学最新成果学術報告会「金の冠 銀のブーツ 遼代王妃墓 の謎を探る」の開催（平成 30 年 2 月 25 日）

奈良県立橿原考古学研究所との共催により「金の冠 銀のブーツ
遼代王妃墓の謎を探る」と題し、本学がかねてより推進してきた「奈
良学」の観点から、シルクロードにおける考古学の最新成果をもとに
奈良と東アジア地域との関連を探る学術報告会を開催した。本報告会
では、蕭氏貴妃（993 年薨去）墓調査の現地責任者として平成 27 年
から発掘を指導した内蒙古文物考古研究所の蓋志勇先生を招聘し、内
蒙古での考古学の最新成果を発表した。中国では、発掘現場は国家の
厳重な管理下に置かれており、海外からはなかなか現地の様子をうか
がい知ることができない。本講演は、これまで未発表であった発掘現
場を収めた写真等を紹介しつつ、小王力溝遼墓の全貌を初めて海外で
明らかにするものである。また、同時に、ガラスの分析を専門とする東



京理科大学の中井泉教授にも登壇いただき、内蒙古博物院と共同で実施した蕭氏貴妃墓をはじめとする、遼代の貴族墓出土ガラス器の成分分析の調査結果についても初めて全容を報告した（平成 28 年度採択 文部科学省科学研究費）。



・遼時代の発掘調査の最新成果を発表「十世紀アジア 世界の精華 ～遼代の宮廷文化と平安文化を探る～」の開催（平成 31 年 2 月 17 日）

大和文華館と共催で、成果発表講演会「十世紀アジア世界の精華～遼代の宮廷文化と平安文化を探る～」を大和文華館講堂にて開催した。本講演会では、中国内蒙古自治区で文化財調査を行っている第一線の研究者が、遼王朝の文化財についての最新の知見を発表した。平成 27 年、内蒙古自治区で初めて遼の皇后の墓が発掘され、発見された数々の出土品は 10 世紀最高の宝物類と評価されている。その宝物類のなかでも、4 点のガラス器は、原産地が従来考えられていた西アジアや地中海沿岸地域ではなく、中央アジアだった可能性が高いことが、成分分析により定量的に裏付けられた。発掘時にいずれもバラバラの状態だったガラス器は、現在日本の修復研究者が中国での技術指導に当たり、毎年 1 点ずつ修復作業が進められている。本講演会では、中国で初めて行われている日中共同の古代ガラスの修復について、専門家の報告が行われるとともに、ガラス器と同時に発掘された大量の染織品について、調査により明らかにされた平安時代の日本と遼との交流についても報告が行われた。

●当該研究に関する実績（論文、発表、メディア掲載等）

- ・平成 29 年 12 月 読売新聞掲載
- ・平成 30 年 2 月 奈良県立橿原考古学研究所でシンポジウムを開催、複数の新聞テレビで紹介
- ・平成 30 年 3 月 「奈良学研究」に掲載
- ・平成 30 年 3 月 日本ガラス工芸学会紀要（GLASS）に掲載
- ・平成 31 年 2 月 大和文華館でシンポジウムを開催

■研究取組③

- 研究課題名 永野大造氏撮影のガラス乾板を手がかりとした奈良仏像史の研究
- 研究代表者所属・職・氏名 文学部・教授・鷲森浩幸
- 研究協力者所属・職・氏名 文学部・講師・服部敦子
- 研究内容・方法

帝塚山大学が所蔵する永野大造撮影ガラス乾板写真資料 6,934 枚を対象として、基本的な現物調査および保存に関わる研究を行い、将来の活用に向けた基礎的な報告書を作成する。それと関連して戦後の奈良の寺院の動向を総合的に検討し、「奈良学」研究に寄与する。なお、資料のデジタル・アーカイブ化、永野大造の業績研究や戦後の寺院研究について科学研究費補助金を得て研究を推進中である。

●研究実績

現物調査を継続し、初期的な調査を終了し、高精細画像の撮影を進めた。平成 30 年 3 月に『永野鹿鳴荘ガラス乾板資料調査概報(1)』を刊行し、30 年 10 月、12 月に研究会を実施（下記参照）。なお、兼古健悟氏は入江泰吉記念奈良市立写真美術館技術員（ゲストとして研究発表）。11 月に奈良学総合文化研究所主催の公開講座で研究成果を発表（下記参照）。11 月に毎日新聞社記者の取材を受けた（鷲森・服部）。31 年 2 月に奈良学総合文化研究所の紀要に論文を発表（服部 下記参照）。3 月に『永野鹿鳴荘ガラス乾板資料調査概報(2)』『同(3)』を刊行した。令和元年度は、さらに研究を推進し、令和 2 年 3 月に『永野鹿鳴荘ガラス乾板資料調査概報(4)』『同(5)』刊行し、概報全 5 冊の発行を終了した。同時期に東京の 2 美術館（日本カメラ博物館・半蔵門ミュージアム）において、2 館と共同して展示を行った。また、当資料に関係する研究論文 2 本を発表した。

●研究の記録（一部）

・奈良学総合文化研究所主催の公開講座『奈良学への招待 17』での研究発表（平成 30 年 10 月 3 日）

本学では、奈良の文化的事象に関する研究を行い、情報発信をはかる「奈良学」の趣旨に鑑み、広く日本文化研究を推進し、学術文化の進展に寄与することを目的として、奈良学総合文化研究所を設置している。本研究所で定期的に開催している「奈良学への招待」において、服部敦子講師が「永野鹿鳴荘の仏像写真についてーデジタル化作業からわかったことー」と題する研究発表を行った。



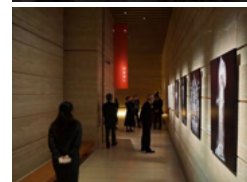
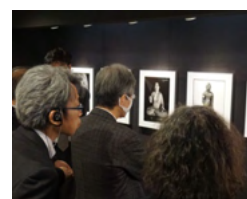
・永野鹿鳴荘ガラス乾板資料調査概報

もっとも基本的な調査報告。ガラス乾板に写し込まれた画像そのものより、撮影された対象の所有者、硫酸紙の包装紙の形状やそこに書かれたメモのような文字、収納する箱に書かれたメモなどの基本情報（メタ・データ）を 1 点ずつ調査し、情報として集積した。

本文の形式は単純な表で、特に面白いものではないが、今後、永野鹿鳴荘ガラス乾板資料研究の最初に参照されるべき情報となる。3 年間かけて計 5 冊を刊行し、完結した。

・「仏像－永野鹿鳴荘ガラス乾板より」「大和路の仏にであう－奈良に生きた写真家・永野太造と仏像写真」展の開催

平成 29 年度に購入した高精細カメラ機材での撮影、および本年度刊行終了した調査概報の成果を一般公開する目的で、展覧会を開催した。会場は前者が一般社団法人日本カメラ博物館附属 JCII フォトサロン、後者が私立美術館である半蔵門ミュージアム（住所はともに東京都千代田区半蔵門 25 番地）であり、会期は前者が 3 月 4 日～3 月 29 日、後者は新型コロナウイルス感染予防の観点により開催日未定～6 月 14 日である。展示の内容は前者がガラス乾板から現像したシルバーゼラチンプリント 73 点、後者が高精細カメラによる等身大仏像写真を含むデジタルプリント 51 点で構成し、前者は畿内寺院が所蔵する仏像の写真を尊像別に展示し、後者は大和路に所在する寺院の仏像の写真を地域別に展示する。撮影時期はいずれも 1950 年から 60 年が中心である。両館はともに入館料無料である。なお、3 月 3 日には関係者のみによる内覧会を行った（写真）。



●当該研究に関する実績（論文、発表、メディア掲載等）

- ・平成 30 年 3 月 『永野鹿鳴荘ガラス乾板資料調査概報(1)』刊行
- ・平成 30 年 10 月 服部敦子「永野鹿鳴荘ガラス乾板資料の調査報告－資料性と活用に向けて－」（研究発表 奈良学総合文化研究所例会）
- ・平成 30 年 11 月 服部敦子「永野鹿鳴荘の仏像写真について－デジタル化作業からわかったこと－」（公開講座 奈良学総合文化研究所「奈良学への招待 17」）
- ・平成 30 年 12 月 毎日新聞記事掲載（平成 30 年 12 月 9 日）
- ・平成 30 年 12 月 兼古健悟「永野資料・写真美術館蔵ガラス乾板について」（研究発表 奈良学総合文化研究所例会）
- ・平成 31 年 2 月 服部敦子「永野鹿鳴荘ガラス乾板資料の調査結果について」（『奈良学研究』21）
- ・平成 31 年 3 月 『永野鹿鳴荘ガラス乾板資料調査概報(2)』『永野鹿鳴荘ガラス乾板資料調査概報(3)』刊行
- ・令和 2 年 3 月 『永野鹿鳴荘ガラス乾板資料調査概報(4)』『永野鹿鳴荘ガラス乾板資料調査概報(5)』刊行（概報の刊行は完結）
- ・令和 2 年 3 月 日本カメラ博物館において永野太造写真展「仏像－永野鹿鳴荘ガラス乾板より－」を開催
- ・令和 2 年 3 月～6 月 半蔵門ミュージアムにおいて「大和路の仏にであう－奈良に生きた写真家・永野太造と仏像写真－」を開催
- ・令和 2 年 3 月 鷺森浩幸「1970 年大阪万博と奈良」（『日本文化史研究』51）

■研究取組④

- 研究課題名 大和野菜の食品機能特性について
- 研究代表者所属・職・氏名 現代生活学部・教授・新宅賀洋
- 研究協力者所属・職・氏名 現代生活学部・准教授・佐伯孝子
- 研究内容・方法

平成 17 年に国民が健全な心身を培い、豊かな人間性を育むため食育基本法が制定された。食は命の源であり、私たち人間が生きていくために食は欠かせず、健全な食生活を日々送り、おいしく楽しく食べることは、人に生きる喜びや楽しさを与える。食育には日本の食文化を継承するということが含まれる。一方、地域振興などのため、地域で生産された農作物をその地域で消費する「地産地消」が進められている。また、各地に残されている伝統野菜を次の世代につなげようとする活動が盛んになっている。奈良では伝統野菜として平成 17 年 10 月に大和野菜として、「大和の伝統野菜」と「大和のこだわり野菜」の 2 つに分けられた。食品のもつ機能性としては栄養素を含むという一次機能、味、香りなどのおいしさに関わる二次機能、生体機能の調節などの三次機能がある。伝統野菜は、地域の食文化の継承の一翼を担っていることになる。奈良の情報発信および食文化の継承への貢献を果たすために、食物学的特性として大和の伝統野菜の機能性を明らかにし、さらには実際に食べ物として活用範囲を広めることを目的とする。

●研究実績

平成 29～令和元年度は、日本食品分析センターにひもとうがらし、大和丸なす、片平あかね、宇陀金ごぼう、大和まな、筒井れんこん 5 大栄養素、ビタミン、ミネラルの分析を依頼した。また、前述の野菜について、味認識装置による分析も依頼した。ひもとうがらし、宇陀金ごぼう、大和まな、大和丸なすなどの抗酸化力測定を行った。大和まなおよび宇陀金ごぼうは、遊離アミノ酸の分析も行った。

●研究の記録（一部）

- ・大和の伝統野菜を食卓に！大和野菜の料理教室を開催
(平成 31 年 3 月 7 日)

大阪ガスッキングスクール奈良にて、「大和野菜を知ろう！～大和の伝統野菜を食卓に～」と題して、講演会と料理教室を開催した。大和の伝統野菜や奈良県産の食材は、JA ならけん、「まほろばキッチン JA 奈良駅前店」から新鮮な野菜を提供いただき、様々な季節の野菜にふれながら学び、料理を作って食べる、皆さんで楽しい「奈良学」体験教室となった。



- ・食物栄養学科の学生が大和野菜のオリジナルスイーツを開発
(令和元年 10 月 20 日)

本学食物栄養学科管理栄養士養成課程の佐伯孝子准教授ゼミの学生らが開発した大和野菜スイーツを、大和郡山城ホールで開催された「第 8 回大和郡山良い食品博覧会」に出品した。地元の洋菓子製造販売会社「菓楽」と連携して考案された大和野

菜スイーツはオリジナリティあふれる4種類。学生は佐伯准教授の指導のもと、野菜の風味や栄養を生かしつつスイーツとしてのおいしさを両立させるレシピを試行錯誤しながら開発。最初の試作は野菜くさが鼻について食べられたものではなく、配合量を少しずつ変えた試作を繰り返して最適な量にたどりついた。また、原価を考えると断念せざるを得なかったレシピもあるなど、学生は時間や費用に制限のある現実の商品開発の難しさを今回のプロジェクトを通して学んだ。

・奈良学総合文化研究所主催の公開講座『奈良学への招待 18』での研究発表（令和元年11月2日）

本学では、奈良の文化的事象に関する研究を行い、情報発信をはかる「奈良学」の趣旨に鑑み、広く日本文化研究を推進し、学術文化の進展に寄与することを目的として、奈良学総合文化研究所を設置している。本研究所で定期的に開催している「奈良学への招待」において、新宅賀洋教授が「大和野菜の魅力」と題する研究発表を行った。



●当該研究に関する実績（論文、発表、メディア掲載等）

- ・平成30年4月 茜祭にて、大和野菜、奈良県産食材を使用した弁当販売
- ・平成30年10月 第7回大和郡山良い食品博覧会 食の語り部講座にて、大和まなをはじめとした大和野菜や奈良産の食材を取り入れた「殿様弁当」の販売
- ・平成30年12月 大和野菜の抗酸化力測定結果を卒業研究発表会にて報告
- ・平成31年3月 大和野菜、奈良県産食材を使用した調理実習(大阪ガス協力)と講演(JAならけん)の実施
- ・平成31年4月 茜祭にて、大和野菜、奈良県産食材を使用した弁当販売
- ・平成31年4月より1年間 KCN マガジン「大和野菜でクッキング」として、メールマガジンにて毎月1回 大和野菜のレシピを掲載
- ・令和元年7月 まほろばキッチン JR 奈良店周年祭にて、大和野菜を用いたお菓子の販売
- ・令和元年9月 JA ならけん西ノ京 大和野菜を用いた薬膳料理講習会
- ・令和元年10月 第8回大和郡山良い食品博覧会 食の語り部講座にてお菓子の販売
- ・令和元年11月 帝塚山小学校にて大和野菜を用いたお菓子の販売
- ・令和2年3月 「大和野菜のレシピ」を刊行

■研究取組⑤

- 研究課題名 奈良晒（さらし）の研究
- 研究代表者所属・職・氏名 帝塚山大学・名誉教授・植村 和代
- 研究協力者所属・職・氏名 帝塚山大学・元非常勤講師・澤田 絹子
琉球大学・名誉教授・片岡 淳

●研究内容・方法

本学は、他に類をみないおよそ 100 台の織物に関する機具を保有している。江戸時代に奈良の産業として栄え、現在も形をかえて生産されている、高級麻織物「奈良晒」について、理論と実践の両面から研究し、それを展開させ、成果を公表する。また、その成果に基づく織物講座を「履修証明プログラム」として実施し、社会人の学び直しを推進する。

●研究実績

平成 29 年 10 月より、織物講座初級編（第一期生）を開講。翌年 1 月に 7 名の修了者を輩出。
平成 30 年 5 月より、織物講座応用編（第一期生）を開講。同年 9 月に 6 名の修了者を輩出。
平成 30 年 10 月より、織物講座初級編（第二期生）を開講。翌年 1 月に 8 名の修了者を輩出。
令和元年 5 月より、織物講座応用編（第二期生）を開講。同年 9 月に 5 名の修了者を輩出。
令和元年 6 月より、織物講座研究編（第一期生）を開講。翌年 1 月に 5 名の修了者を輩出。
令和元年 10 月より、織物講座初級編（第三期生）を開講。翌年 1 月に 7 名の修了者を輩出。
平成 29 年度・30 年度・令和元年度の 3 年間で、上記修了者のべ計 38 名に対し、学校教育法第 105 条の規定に基づく履修証明書を発行（私立大学等経常費補助金 特別補助対象事業）。

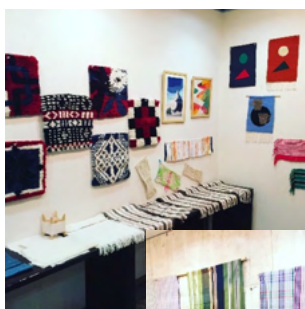
研究成果の公表の機会として、平成 30 年・31 年のあかね祭において、本学 5 号館 1 階織物実習室にて織物講座作品展を開催。また、平成 30 年 11 月・令和 2 年 12 月に、ギャラリー GM-1 において織物講座作品展を開催し、第 1 回・第 2 回共に 3 日間で 50 名を超える来場者を数えた。奈良晒や大和機、織物の発明から現在までの歴史、染色技法、世界の織機等、織物について体系的・学際的に取り組む社会人向け講座は全国的にも珍しく、複数回の新聞取材を受けるなど、本学のブランディングに寄与している。

●研究の記録（一部）

・織物講座（初級編・応用編・研究編）の開講（平成 29 年～令和 2 年）

社会人の学び直しの一環として、織物の歴史や複数の織物技術の習得を通じて、奈良の地域振興の活性化に貢献する人材を育成することを目的に、織物講座を開講した。講座修了者には、各編に応じた履修証明書「帝塚山大学織物マイスター」を発行。本講座は、座学形式の講義と織機等を使用した実習によって構成されている。講義では、織物の発明から織物の歴史（西アジア・東アジア・日本）、染織技法や世界の織機等について幅広い内容で展開された。実習では、奈良の伝統産業の「奈良晒」や「大和機」、古代の織物技法「腰機」、「平織」「綾織」「花織」「ノッティング」「綴れ」「麻・木綿の糸作り」、アンデスの「組紐」など様々な織物の技術の習得を目指して実施された。





・織物講座作品展の開催（平成 30 年～令和元年）

【学内作品展（大学祭併催）】

第 1 回：平成 30 年 4 月 22 日

第 2 回：平成 31 年 4 月 21 日

【学外作品展】

第 1 回：平成 30 年 11 月 23 日～25 日

第 2 回：令和元年 12 月 6 日～8 日

「織物講座」を修了した受講生の作品展をギャラリー GM-1 にて開催。各年度の応用編修了生が、約半年をかけて作り上げた織物作品の数々が展示された。奈良新聞等の取材もあり、織物やアートに関心のある一般来場者も多く、好評を博した。

・奈良学総合文化研究所主催の公開講座『奈良学への招待 17』での研究発表（平成 30 年 10 月 27 日）

本学では、奈良の文化的事象に関する研究を行い、情報発信をはかる「奈良学」の趣旨に鑑み、広く日本文化研究を推進し、学術文化の進展に寄与することを目的として、奈良学総合文化研究所を設置している。本研究所で定期的に行っている「奈良学への招待」において、植村和代名誉教授が「奈良晒と大和機」と題する研究発表を行った。



●当該研究に関する実績（論文、発表、メディア掲載等）

- ・平成 29 年 7 月 染織専門誌（染織情報 α）への織物講座第一期生募集告知掲載
- ・平成 29 年 10 月 奈良新聞掲載：「楽しく織物実習 歴史や基本技法学ぶ 帝塚山大で市民講座」
- ・平成 30 年 4 月 帝塚山大学織物講座 学内作品展 於：本学 5 号館 1 階織物実習室
- ・平成 30 年 7 月 染織専門誌（染織情報 α）への織物講座第二期生募集告知掲載
- ・平成 30 年 7 月 奈良新聞掲載：「奈良の伝統織機『大和機』実習 帝塚山大 社会人学び直しの講座」
- ・平成 30 年 10 月 植村和代「奈良晒と大和機」（奈良学総合文化研究所 公開講座『奈良学への招待 17』）
- ・平成 30 年 11 月 帝塚山大学織物講座 第一回作品展（11 月 23 日～25 日）於：ギャラリー GM-1
- ・平成 30 年 11 月 奈良新聞掲載：「帝塚山大 織物講座受講生の作品展」
- ・平成 31 年 4 月 帝塚山大学織物講座 学内作品展 於：本学 5 号館 1 階織物実習室
- ・令和元年 7 月 染織専門誌（染織情報 α）への織物講座第三期生募集告知掲載
- ・令和元年 12 月 帝塚山大学織物講座 第二回作品展（12 月 6 日～8 日）於：ギャラリー GM-1

■研究取組⑥

- 研究課題名 五條市の歴史学的研究
- 研究代表者所属・職・氏名 文学部・教授・岩井 洋
- 研究協力者所属・職・氏名 文学部・教授・牟田口章人
- 学外研究協力機関・担当者 五條市
NPO 法人五新線再生推進協議会
NPO 法人うちのの館

●研究内容・方法

本研究は、本学と連携協定を結んでいる五條市の歴史文化を多角的・学際的に研究するとともに、五條市の観光や地域活性化に資する歴史文化的資源を発掘し、その活用方法について五條市に提案する、実践的な歴史研究をめざす。具体的な研究対象としては、産業遺産としての五新線（未成線）、藤岡家を中心とする知識人ネットワーク、江戸の花火師の元祖・鍵屋弥兵衛、赤根屋半七と茜染、などがあげられる。

●研究実績

平成 29～30 年度は、藤岡長和関係資料を入手し、長和をめぐる同時代の文化人たちとの交流に関する知見を得た。平成 29 年度に撮影した五新線および新町の映像を再編集した。平成 30 年 5 月 20 日、6 月 9 日、8 月 5 日に五條市を訪問し、NPO 法人五新線再生推進会議の会議に出席し、五新線の活用に関する打ち合わせをした。また、同年 7 月 14 日、本学にて、同 NPO 関係者との打ち合わせをした。平成 31 年度は、令和 2 年 3 月 1 日に五條新町の町並みを撮影した。また、まちづくりに関して、まちなみ伝承館、五條源兵衛、北山牛乳店などにお話をうかがい、旧藤岡家住宅の撮影をするとともに、NPO 法人うちのの館にお話を伺った。3 月 2 日は、五新線の撮影を行った。また、五新線のデジタルコンテンツ作成のために、五條市史跡公園にて機関車の撮影をした。

●研究の記録（一部）

・「五新鉄道夢列車」

五條市の未成線である五新鉄道を 4K 映像で建設同時の風景を今によみがえらせた。

[活用実績]

- ・市立五條文化博物館
- ・五條市観光交流センター
- ・京都鉄道博物館



・奈良学総合文化研究所主催の公開講座『奈良学への招待 17』で

の研究発表（平成 30 年 10 月 20 日）

本学では、奈良の文化的事象に関する研究を行い、情報発信をはかる「奈良学」の趣旨に鑑み、広く日本文化研究を推進し、学術文化の進展に寄与することを目的として、奈良学総合文化研究所を設置している。本研究所で定期的に行っている「奈良学への招待」において、岩井洋教授が「五條からみる近世史」と題する研究発表を行った。



●当該研究に関する実績（論文、発表、メディア掲載等）

- ・平成 29 年 11 月 岩井 洋「五條からみる近世史」帝塚山大学奈良学総合研究所 公開講座「奈良学への招待 XVI 大和の地と人」
- ・平成 30 年 3 月 岩井 洋「五條からみた近世」『奈良学研究』第 20 号
- ・平成 31 年 3 月 岩井 洋「近現代の交通遺産にみる奈良の産業と地勢」『奈良学研究』第 21 号

■研究取組⑦

- 研究課題名 民俗資料や聞き取り調査による奈良県内各地域の生活文化研究
- 研究代表者所属・職・氏名 文学部・教授・高田照世
- 研究協力者所属・職・氏名 文学部・准教授・花田卓司
現代生活学部・准教授・矢部仁見
現代生活学部・准教授・小菅瑠香
- 学外研究協力機関・担当者 奈良県立図書情報館
奈良県立民俗博物館・茶谷まりえ
斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課・平田政彦

●研究内容・方法

奈良県の東部高原地域、来た西部地域を中心に民俗調査を実施し、民俗文化の研究を行う。また、その成果を地域に還元、発信する。

●研究実績

平成 30 年度は、6 月 26 日～7 月 8 日に、奈良県立図書情報館との共催展示「奈良学との出会い I 山里に行き交う職人たち～天理・福住永井清繁画帳から～」を実施した。また、『奈良山里の生活図誌』を刊行した。

●研究の記録（一部）

- ・明治後期から昭和初期の奈良の露店を再現（本学の学生と大学院生が帝塚山小学校で 3 年生を対象に社会科の授業を実施）（平成 30 年 2 月 14 日）

文学部日本文化学科、現代生活学部居住空間デザイン学科の学生と人文科学研究科の大学院生が、帝塚山小学校の 3 年生を対象に、「昔の道具と人々の暮らし」で社会科の授業を行った。本授業は、帝塚山小学校の児童に奈良の昔の暮らしについて理解を深めてもらうことを目的としたもので、本学文学部日本文化学科で平成 27 年度から取り組んできた「福住プロジェクト」での研究成果をもとに企画。帝塚山学園内の教育連携の一環として実施した。



- ・奈良県図書情報館との共催による奈良の昔のくらしを描いた絵をパネル展示「山里に行き交う職人たち」の開催
（平成 30 年 6 月 26 日～7 月 8 日）

奈良県立図書情報館との共催で、特別展示「山里に行き交う職人たち～天理市福住・永井清繁さんの画帳から～」また、本学の文学部日本文化学科、現代生活学部居住空間デザイン学科の学生と人文科学研究科の大学院生が、本展示の関連イベントとして、「昔のくらしを体験してみ

よう！」を実施した。イベント当日は、昔の暮らしを体験するイベントと展示解説を行ったほか、パネル展示のもととなった原画（永井清繁画）を1日限定で特別公開した。さらに、別会場では、本学文学部の教員および、絵を描かれた永井さんのご息女による特別講演も開催した。原画公開、体験イベント、特別講演と盛りだくさんの企画で、幅広い年代層の方々にお楽しみいただけた一日になった。

・奈良県立民俗博物館との共催による秋季特別展示「絵と道具でたどる昔の奈良の暮らし」の開催
(令和元年9月21日から12月1日)

奈良県立民俗博物館と共催で特別企画展示「絵と道具でたどる昔の奈良の暮らし」(於：奈良県立民俗博物館)を開催した。この特別企画展示は、郷土の風俗慣習や生活の推移への理解を深めることを目的に、天理市福住で生まれ育った故・永井清繁氏が昔の奈良の暮らしを描いた生活絵図のパネルを、県立民俗博物館の常設展示である生活用具やジオラマとともに展示したものである。展示期間中に社会科学見学で訪れた小学生に民俗学ゼミの学生が展示解説をした。また、11月16日に行われた「みんぱく秋まつり」では、約40名の文学部の学生と人文科学研究科の大学院生が昔の暮らしを学ぶ体験型イベントを企画から当日運営までを手がけた。



●当該研究に関する実績（論文、発表、メディア掲載等）

- ・平成24年3月 『祖霊と精霊の祭場―地域における民俗宗教の諸相―』（岩田書院）
- ・平成27年2月6日 「福住のくらしーひいおじいちゃんのスケッチブッカー」展示（天理市文化センター）
～3月6日
- ・平成28年2月 「奈良県生駒市高山町の人生儀礼に関する民俗誌」（「奈良学研究」18号）
- ・平成28年2月17日 「むかしのくらし」（帝塚山小学校での教育実践）
- ・平成28年10月 「永井清繁画展」展示（天理市福住公民館）
- ・平成28年11月 「永井清繁画展」展示（天理市山田公民館）
- ・平成30年6月26日 「奈良学との出会いⅠ 山里に行き交う職人たち ―天理・福住永井清繁氏の画帳から―」（奈良県立図書館との共催展示）
～7月8日
- ・平成31年3月31日 高田照世編『奈良山里の生活図誌』（帝塚山大学出版会）刊行
- ・平成31年4月15日 読売新聞「本 よみうり堂 関西館」に『奈良山里の生活図誌』の記事掲載

■研究取組⑧

- 研究課題名 奈良県北西部の山・里・川と人々の営みに関する総合的な歴史・文化研究
- 研究代表者所属・職・氏名 文学部・教授・鷺森浩幸
- 研究協力者所属・職・氏名 文学部・教授・清水昭博
文学部・教授・高田照世
文学部・准教授・杉崎貴英
文学部・准教授・花田卓司

●研究内容・方法

本学の存在する奈良県の北西部を中心とする地域の歴史や多様な文化遺産の学際的な調査・考察を通して、当該地域のさまざまな活動に学問的な基礎を提供することを目的とし、高山地域などの瓦（考古学）、神武東征説話・物部氏（古代史）、矢田寺など庶民信仰および造形文化資料（美術史）、斑鳩の民俗（民俗学）、古道や文書史料の研究などを構成テーマとする。

●研究実績

平成 30 年度は、研究資料として法隆寺に関連する中世文書を購入した。平成 30 年 5 月 23 日および 10 月 13 日に奈良県生駒市（富雄川左岸地域）に出向き現地調査を実施した。調査では当該地域の古道に関わる文化財の概観的な把握の成果が得られた。8 月 23、30 日、9 月 3、11、12、16、17 日に奈良県斑鳩町神南地区に出向き現地調査を実施した。調査では口承、文書による情報、瓦製造に関わる情報の収集の成果が得られた。奈良学総合文化研究所主催の「奈良学への招待 17」において、研究成果を発表した。その成果は『奈良学叢書 2 奈良学研究の現在』に収録された。また、学内外の研究会において研究成果を発表した（下記参照）。当プロジェクトに関わるものも含む奈良学総合文化研究所所蔵の古文書を、附属博物館において展示した（「奈良学との出会い 帝塚山大学所蔵の古文書」展（下記参照）。奈良市西部公民館主催の公開講座『学園前の古代・現代・未来』において現地調査の成果を発表した（下記参照）。「帝塚山大学所蔵の古文書」展の成果を受けて、『奈良学叢書 3 奈良学研究の現在 2』に歴史資料を中心とする報告（下記参照）を掲載した。民俗文化調査・古道の調査の報告書を作成した（下記参照）。また、斑鳩町の民俗調査には、大学院生も参加したが、西連寺匠「瓦工房の民俗 — 奈良県生駒郡斑鳩町神南の事例 —」（『日本文化史研究』50）、「瓦職人の系譜と生産活動 — 奈良県生駒郡斑鳩町神南 孫七瓦の事例 —」（『日本文化史研究』51）、清水智子「昭和 2 年の民家建築の記録—奈良県生駒郡斑鳩町神南 U 家の事例—」（日本民俗建築学会で発表予定）の研究業績が生まれたのは特筆される。

●研究の記録（一部）

- ・奈良学総合文化研究所主催の公開講座『奈良学への招待 17』での研究発表（平成 30 年 11 月 10 日、24 日）

本学では、奈良の文化的事象に関する研究を行い、情報発信をはかる「奈良学」の趣旨に鑑み、広く日本文化研究を推進し、学術文化の進展に寄与することを目的として、奈良学総合文化研究所を設置している。本研究所で定期的に開催している「奈良学への招待」において、杉崎貴英准教授「矢田地



蔵縁起絵の世界」と西連寺匠大学院生「斑鳩の民俗文化」が研究発表を行った。



・帝塚山大学附属博物館での企画展示「帝塚山大学所蔵の古文書」の開催（平成 31 年 2 月 9 日～3 月 9 日）

本学附属博物館において、本学所蔵の古文書を展示する企画展示「奈良学とのであい 帝塚山大学所蔵の古文書」を開催した。また、同時に奈良学総合文化研究所主催の「名品・名作誕生 16」では、「帝塚山大学所蔵の古文書展によせて」と題し、最新の取組を連続 4 回の公開講座で紹介した。

●当該研究に関する実績（論文、発表、メディア掲載等）

- ・平成 30 年 5 月 花田卓司「大和国飽波郷について」（第 73 回「ムラの戸籍簿」研究会 立命館大学）
- ・平成 30 年 10 月 鷺森浩幸「富雄川に沿う道と宗教施設」（奈良学総合文化研究所 例会）
- ・平成 30 年 11 月 杉崎貴英「矢田地蔵縁起絵の世界」（奈良学総合文化研究所 公開講座『奈良学への招待 17』）
- ・平成 30 年 11 月 西連寺匠「斑鳩の民俗文化」（同上 参考）
- ・平成 31 年 2～3 月 企画展示『奈良学とのであい 帝塚山大学所蔵の古文書』（帝塚山大学附属博物館）
- ・平成 31 年 2 月 鷺森浩幸「学園前周辺の古代史を学ぶ」（奈良市西部公民館 公開講座『学園前の古代・現代・未来』）
- ・平成 31 年 3 月 杉崎貴英「矢田地蔵縁起絵の世界」（『奈良学叢書 2 奈良学研究の現在』）
- ・平成 31 年 3 月 帝塚山大学附属博物館での企画展示「帝塚山大学所蔵の古文書」の開催
- ・令和 2 年 3 月 鷺森浩幸・花田卓司「帝塚山大学所蔵の古文書」（『奈良学叢書 3 奈良学研究の現在 2』）
- ・令和 2 年 3 月 調査報告『奈良県生駒郡斑鳩町神南の民俗文化』『富雄川流域の古道』の刊行

■シンポジウム・成果報告会・公開講座・展示

・奈良学の軌跡展 萌芽期から黎明期、そして発展へ

(平成30年6月26日～7月20日)

本展では、「奈良学」を提唱した帝塚山短期大学 名誉教授の故・青山茂氏の遺稿や調査カードからうかがえる「奈良学」の考え方を明らかにするとともに、本学のあゆみとともに発展、進化してきた「奈良学」の遍歴に迫った。また、「奈良学の目指すもの」と題し、奈良学総合文化研究所所長の鷲森教授と前学長である文学部の岩井教授による公開講座も開催された。

[展 示] 平成30年6月26日(火)～7月20日(金)

帝塚山大学 奈良・東生駒キャンパス 図書館

[公開講座] 「奈良学の目指すもの」 平成30年6月26日(火)～7月20日(金)

帝塚山大学 奈良・東生駒キャンパス 図書館 シーキューブ



・興福寺中金堂落慶記念・帝塚山大学文学部「奈良学」フォーラム 祈りと復興(平成30年10月14日)

約300年ぶりに再建された興福寺中金堂の落慶を記念し、本学文学部の奈良学フォーラム「祈りと復興」を興福寺会館で開催した。当日は、本学の蓮花学長、本学特別客員教授でもある興福寺貫首の多川俊映師の挨拶にはじまり、興福寺旧境内の瓦窯跡の紹介、フリーアナウンサーの岡崎ゆう子氏による澤田瞳子氏の最新作『龍華記』の朗読、興福寺国宝館の拝観案内に続いて、最後には小説家の澤田瞳子氏を交えての座談会という盛りだくさんの内容で、会場に詰め掛けた200人を超える歴史・文学ファンが、豪華なプログラムを堪能した。



・奈良学への招待XVII 帝塚山大学の奈良学研究

(平成30年10月20日～11月24日)

奈良学総合文化研究所主催の公開講座「奈良学への招待XVII」を開催した。全5回の連続講座で、本講座を通して、本学の特色である「学際的奈良学研究」を地域の方々に広く周知した。

[第1回] 「五條の歴史学的研究-交通遺産としての五新線を中心として-」(10月20日)

文学部・教授 岩井 洋

[第2回] 「奈良晒と大和機」(10月27日)

名誉教授 植村 和代

[第3回] 「永野鹿鳴荘の仏像写真について-デジタル化作業からわかったこと-」(11月3日)

文学部・講師 服部 敦子

[第4回] 「斑鳩の民俗文化-奈良の生活文化研究-」(11月10日) 大学院生 西連寺 匠

[第5回] 「矢田地蔵縁起絵の世界-奈良北西部の歴史・文化研究-」(11月24日)

文学部・准教授 杉崎 貴英





・企画展示 奈良学とのであい 帝塚山大学所蔵の古文書 (平成 31 年 2 月 9 日～3 月 9 日)

帝塚山大学附属博物館において、帝塚山大学所蔵の古文書を展示する企画展示「奈良学とのであい」を開催した。

・名品・名作誕生 XVI 帝塚山大学所蔵の古文書展によせて (平成 31 年 2 月 9 日～3 月 9 日)

同時に奈良学総合文化研究所主催の「名品・名作誕生 XVI」では、「帝塚山大学所蔵の古文書展によせて」と題し、最新の取組を連続 4 回の公開講座で紹介した。

- | | | |
|-----------------------------------|-----------|--------|
| [第 1 回]「源氏物語古系図の資料的価値」(2 月 9 日) | 文学部・教授 | 清水 婦久子 |
| [第 2 回]「鎌倉時代の大和国平群郡飽波郷」(2 月 16 日) | 文学部・准教授 | 花田 卓司 |
| [第 3 回]「平安時代初期の興福寺と藤原氏」(3 月 2 日) | 文学部・教授 | 鷺森 浩幸 |
| [第 4 回]「大和国の近世文書」(3 月 9 日) | 天理大学・名誉教授 | 谷山 正道 |

・シルクロード 黄金文化の道 (平成 31 年 3 月 2 日)

本学とウズベキスタン考古学研究所が、本年度に共同実施したウズベキスタン・サマルカンド市カフィル・カラ城（シルクロード都市）の調査において、本学文学部 宇野隆夫教授（当時、現在は帝塚山大学客員教授）を調査責任者とする調査団が玉座があると推定した部屋から、金製品や宝飾の装身具を発掘した。ウズベキスタン・サマルカンド市カフィル・カラ城（シルクロード都市）発掘調査のにおける初めての成果報告会として、学術報告会を開催した。



・奈良学への招待 XVIII 帝塚山大学の奈良学研究 (令和元年 10 月 19 日～11 月 23 日)

奈良学総合文化研究所主催の公開講座「奈良学への招待 XVIII」を開催した。全 4 回の連続講座で、本講座を通して、本学の特色である「学際的奈良学研究」を地域の方々に広く周知した。



- | | | |
|--|--------------|--------|
| [第 1 回]「大和『とみ』地域の古代史」(10 月 19 日) | 文学部・教授 | 鷺森 浩幸 |
| [第 2 回]「大和野菜の魅力」(11 月 2 日) | 現代生活学部・教授 | 新宅 賀洋 |
| [第 3 回]「絢爛豪華 騎馬民族の宮廷生活－発掘でわかった契丹王朝－」(11 月 9 日) | 文学部・教授 | 牟田口 章人 |
| [第 4 回]「薬師寺金堂薬師三尊像の制作年代と機能」(11 月 23 日) | 佛教大学・龍谷大学・講師 | 中野 聡 |

・名品・名作誕生XVII（令和2年2月9日～3月9日）

同時に奈良学総合文化研究所主催の「名品・名作誕生XVII」では、本事業の最新の取組を連続4回の公開講座で紹介した。

〔第1回〕「室生寺の近代、ふたつの名作の誕生－国宝十一面観音像の光背と、小川晴暲撮影『室生寺大観』と」（2月9日）

文学部・准教授 杉崎 貴英

〔第2回〕「『春日移し』の歴史-春日大社旧社殿の移築慣行について」（2月16日）

文学部・教授 岩井 洋

〔第3回〕「奈良酒造業の伝統と革新」（3月2日）【中止】※

文学部・教授 河口 充勇

〔第4回〕「月刊紙『奈良県観光』と奈良の歴史・文化財」（3月9日）【中止】※

文学部・教授 鷺森 浩幸

・奈良学フォーラム（令和2年3月14日）

【中止、令和2年4月以降の開催検討】※



平成29年度に採択された私立大学研究ブランディング事業における本学の取組「『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的『奈良学』研究の推進」で、本学は地域との協働のもと、奈良の文化資産や観光資源を再発見、再構築し、広く社会に発信することで、研究の力による奈良の新しい魅力の創出を目指してきた。本フォーラムでは、3年間にわたる学際的「奈良学」の研究成果について報告する。また、同時開催で「奈良学関連展示」を実施する。

〔基調講演〕「奈良と歴史学」

栄原 永遠男 氏（大阪市立大学名誉教授）

〔奈良学研究報告〕

「聖徳太子関連遺跡の研究」

清水 昭博（帝塚山大学文学部教授）

「遠代皇帝陵出土文物の研究と正倉院宝物」

牟田口 章人（帝塚山大学文学部教授）

「奈良県北西部の総合的歴史文化研究」

鷺森 浩幸（帝塚山大学文学部教授）

「奈良県の生活文化研究」

高田 照世（帝塚山大学文学部教授）

「本学における奈良学研究的総括」

岩井 洋（帝塚山大学文学部教授）

「外部評価委員の講評」

加藤 久雄 氏

（外部評価委員長・奈良教育大学学長）

※新型コロナウイルス感染症に関して、学生等の安全・安心を第一に迅速かつ的確な対応を行うため、この時期の開催を中止した。

■奈良学ブックレットの発行（帝塚山大学出版会より刊行）

奈良学叢書 2 奈良学の現在

帝塚山大学奈良学研究推進室（編）

価格：¥880（税込）



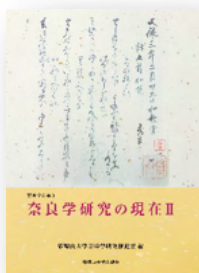
- | | |
|-----------------------|-------|
| はじめに「奈良学が目指すもの」 | 鷺森 浩幸 |
| 1. 五条の歴史学的研究 | |
| －交通遺産としての五新線を中心として－ | 岩井 洋 |
| 2. 奈良晒と大和機 | 植村 和代 |
| 3. 永野鹿鳴荘の仏像写真について | |
| －デジタル化作業からわかったこと－ | 服部 敦子 |
| 4. 斑鳩の民俗文化－奈良の生活文化研究－ | 西蓮寺 匠 |
| | 鷺森 浩幸 |
| 5. 矢田地蔵縁起絵の世界 | |
| －奈良北西部の歴史・文化研究－ | 杉崎 貴英 |
| おわりに「奈良学が目指すもの」 | |
| ～本学の取組と今後の展望～ | 岩井 洋 |

平成 29 年度私立大学研究ブランディング事業採択『『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的『奈良学』研究の推進』により開催した公開講座の内容をもとに、事業の基盤である各プロジェクトの成果を紹介し、あわせて、帝塚山大学が掲げる「奈良学」が目指すものとは何かについても解説する。各プロジェクトは歴史、民俗、美術、工芸の分野について、古代から近現代に至る奈良に関連するテーマをそれぞれ取り上げ、調査と研究により新たな成果を明らかにした。帝塚山大学における奈良学の今を語る本書は、新たな奈良の魅力について知ることができる絶好の一冊でもある。

奈良学叢書 3 奈良学の現在Ⅱ

帝塚山大学奈良学研究推進室（編）

価格：¥770（税込）



- | | |
|--------------------|--------|
| 1. 聖徳太子と古代の三郷 | 清水 昭博 |
| 2. 遼時代の皇族墓についての新知見 | 牟田口 章人 |
| 3. 帝塚山大学所蔵古文書輯 | 鷺森 浩幸 |
| | 花田 卓司 |
| 4. 大和野菜の魅力 | 新宅 賀洋 |

奈良学叢書 2 に引き続き、平成 29 年度私立大学研究ブランディング事業採択『『帝塚山プラットフォーム』の構築による学際的『奈良学』研究の推進』により開催した公開講座および展覧会をもとに、事業の基盤である各プロジェクトの成果を紹介する。各プロジェクトは歴史、考古、美術、現代生活（食文化）の分野について、調査と研究、また教育研究活動により、新たな成果を明らかにした。帝塚山大学における奈良学の今を語る本書は、新たな奈良の魅力と、奈良学の多様性について知ることができる一冊である。

■奈良学関連資料の収集（収集順）

本学には、帝塚山大学考古学研究所が収集した東アジアで出土した瓦を中心とした、考古・民俗・美術史資料の保管、展示公開のほか、学芸員課程を学ぶ学生たちが企画した展示会など様々な企画展示を行なっている附属博物館がある。本事業の取組推進の中で、資料充実の目的から様々な資料を収集し、研究はもちろんのこと、それらを展示し、研究の成果を公表している。

・テラコッタ メデューサ頭飾 アンティフィックス（古代瓦）



メデューサは見た者を石に変える女性であり、魔除けのために屋根に飾られたことがわかる。その意図は古代東アジアの屋根に飾られた装飾瓦である鬼瓦に通じる。本作は鬼瓦など、日本においては奈良に起源をもつものに関係しており、「奈良学」を検討するうえできわめて重要な資料であるが、およそ 2400 年前に製造された出土品ゆえ他に類品はない。また、本作はルーヴル美術館や大英博物館の同型品よりも優品である。古代オリエントや古代地中海の作品は市場に出回ることが非常に少ない。

・南都大仏殿勸進帳



江戸時代に、東大寺の僧公慶を中心に大仏殿の復興に関する勸進を行った際に使用した勸進帳で、復興に際して、大仏の偉業やその来歴、再興の苦心を一般庶民にも分かり易く示した内容となっている。元々は勸進後に大仏胎内に納められていたもので、あまり古書等の市場に出てくるものではなく、貴重な東大寺関係の資料である。江戸時代の南都（奈良）の中心的存在であった東大寺大仏殿の復興に関する資料を本学が入手することは、「奈良学」研究を推進して行く中での基盤をなす資料の一つとして重要である。

・奈良博覧会物品目録 会場第三区大仏殿内 正倉院宝庫 御物陳列目録



明治8年に東大寺を会場に開催された第一次奈良博覧会の展示品の目録。奈良博覧会物品目録は、大仏殿の東西両回廊に並べられた大和の社寺や個人が所蔵する文化財を紹介したもの。また会場第三区大仏殿内正倉院宝庫御物陳列目録は、大仏殿の中に展示された正倉院宝物を紹介したもの。両目録がオリジナルの状態で全て揃っていることは大変稀であり、このような状態のものの入手は困難である。「奈良学」研究を推進して行く中での基盤をなす資料の一つとして、貴重な資料と考えられる。

・蓮華文道具瓦



道具瓦の破片である。外面に側視型の蓮華文を施すきわめて珍しい資料である。全形は明らかではないが、鴟尾等、大型の瓦製品の一部とみられる。蓮華文の表現や瓦の胎土・焼成の特徴から飛鳥時代の制作とみられる。

・飛鳥寺・素弁蓮華文軒丸瓦(残欠)



奈良県高市郡明日香村飛鳥に所在する日本最古の古代寺院、飛鳥寺から出土した素弁蓮華文軒丸瓦の残片である。素弁蓮華文軒丸瓦は飛鳥寺創建期に採用された瓦であり、飛鳥寺が造営された6世紀末～7世紀初頭の時期に製作されたものと考えられる。蓮弁の端部には切り込み上の表現が認められ、百濟直系の飛鳥寺創建瓦（I型式）に該当するものとみられる。聖徳太子関係の古代寺院から出土する法隆寺創建期の瓦のうち、最も古い金堂所用瓦は飛鳥寺と同じ技術で製作された瓦であり、同一の瓦工集団がその生産に関与したものとみられている。そうした観点から、本資料は聖徳太子が建立した法隆寺の歴史を考えるうえでも重要な資料といえる。

・法隆寺（若草伽藍）軒丸瓦



奈良県生駒郡斑鳩町に所在する法隆寺から出土した素弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁3枚分と中房のほぼ全形がわかる破片である。同軒丸瓦は聖徳太子が建立した創建法隆寺（若草伽藍）に採用された瓦である。法隆寺が造営された7世紀中頃の時期に製作されたものと考えられる。

・奈良晒風屏風



奈良晒は、江戸時代の南都の主要産業で、奈良町を中心に商われ、佐保川など近隣の川辺に晒場が持たれていた。当時の作業風景等は、江戸時代に出版された『大和名所図会』や「南都布さらしの記」に見られる程度で、残存数は非常に少ない。「奈良晒関係屏風」は、江戸後期の作品で、浮世絵師の国芳、国貞系の絵師によるものと思われ、肉筆での描写はかなり丁寧かつ精緻なもので、絵具の退色もなく保存状態も良いもので稀少なものと思われる。

・古瓦（四重弧文軒平瓦）



四重弧文軒平瓦は、飛鳥時代の中・後期（7世紀中葉～後半）に典型的な文様である重弧文（円弧を重ねたような文様）を施す。重弧文の表現は重弧文軒平瓦の起源である川原寺（奈良県明日香村所在。660年代に天智天皇によって創建）に近く、瓦の作りも丁寧なことから、年代は7世紀第3四半期に収まるとみられる。出土地は不明であるが、川原寺（生産窯も含む）や只塚廃寺（葛城市）も候補として挙げることができる。状態はほぼ完形。

・古瓦（三重弧文軒平瓦）



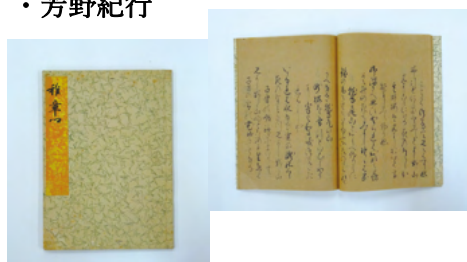
三重弧文軒平瓦は、四重弧文軒平瓦と同様、重弧文の表現が川原寺に近く、瓦の作りも丁寧なことから、年代は7世紀第4四半期に収まるとみられる。出土地は不明であるが、川原寺（生産窯も含む）や小山廃寺（明日香村）を候補として挙げることができる。状態は3分の2程度残存。

・猿沢池木版絵図



かつて猿沢池周辺には江戸時代から旅籠屋や旅館が多数あり、本図は中でも特に有名旅籠であった印判屋庄右衛門が、游山・観光客のために各所案内を兼ねえ作った引札（広告）である。本文と風景画は、江戸後期から明治初期にかけて活躍した大阪の画人、松川半山の筆になるもので、製版は井上治兵衛による。本図には人力車が描かれ、製作年は明治時代とも考えられるが、人力車には彩色がされず、また、筆致も他と異なることから後に付け加えられたものとみられる。そのため製作年代は欄外に記された文久3（1863）年と思われる。

・芳野紀行



飛鳥井雅章は後水尾天皇の側近として活躍した近世初期の堂上歌人で、飛鳥井家は『新古今和歌集』の撰者の一人である雅経を祖とし、蹴鞠と歌道の家として知られる。雅章は飛鳥井家の家道である蹴鞠・和歌・書道のいずれにも秀で、現在でも、雅章筆の書写本が少なからずみられる。本書は雅章が承応3（1654）年3月の吉野花見行の際に草したもので、貞享3（1686）年頃の制作と考えられる。

・素弁蓮華文軒丸瓦



花卉数は11弁で、中房には1+6の蓮子を表現する。花卉先端に膨らみをもつ。こうした特徴の瓦は日本最初の寺院である飛鳥寺をはじめ、飛鳥地域の初期寺院である定林寺や檜隈寺、橘寺でも確認でき、本作の年代を飛鳥時代初期の7世紀初頭に比定することができる。本作の出土に関する記録はないが、文様、瓦当径（17cm）が定林寺例と一致することから、同寺所用瓦であった可能性が考えられる。

・大日本美術図譜 （本編4冊、解説編4冊）



明治34年刊。図譜4冊・解説4冊の計8冊が完存する。正倉院宝物の調査など奈良との関わりも深い小杉楯邨らの編著にかかる。古建築の彩色文様や工芸意匠などが木版多色刷であらわされ、古社寺保存法施行4年後という時点において、どのような文化財が把握され、それらがどのような観点で評価されていたかを雄弁に物語る。

・国宝浄瑠璃寺文様



昭和15年刊（改裝再版）、全53図（帙入り）で、外装と内容物とが完存する。美術院の新納忠之介の編著にかかり、院政期彫刻史上の重要作品として名高い浄瑠璃寺（木津川市）木造四天王像（国宝）の彩色文様の復元模写を分析的に図版化したもの。この文様は平成期の『浄瑠璃寺の四天王像』が詳細だか図版の多くはモノクロで、入り込んだ部位の文様は把握が及んでいないため、現在なお貴重な記録となっている。

・久留春年資料
(法界寺壁画模写 6 枚、地藏菩薩 1 枚、興福寺関係 2 枚)



久留春年（ひさとめ・しゅうねん、1881～1936）は、創立機の日本美術院第二部に画工として所属し、『正倉院式文様集』、『古代芸術拓本稀観』等の著述も残した日本画家である。奈良学に関わる事績を少なからず知りうるが、今やその名さえ忘れられた存在となっている。法界寺壁画模写は、法界寺阿弥陀堂（国宝）内陣壁画飛天図（全 12 面）模写の一部であり、現地での上げ写しによる模写と考えられ、日本美術院による本尊修理事業との関係が考えられる。地藏菩薩は、地藏菩薩の立像の下絵だが、その図像・表現は平安・鎌倉時代の彫像作品を範としたものと考えられ、一候補として法隆寺聖霊院像（平安前期）が挙げられる。久留には文化財修理や著述で法隆寺関係の事績が複数知られ、相互の関係が留意される。興福寺関係は、1 枚は興福寺南円堂の外観の素描であり、もう 1 枚は「興福寺平面図」と題した伽藍配置図で「久留春年遺墨展観」が本坊で開催されるなど久留と興福寺との関係を追認する一助となる点でも注目される。

・豊浦寺・素弁蓮華文軒丸瓦(残欠)



奈良県明日香村豊浦に所在する向原寺で採集された素弁蓮華文軒丸瓦の残欠である。花卉は 3 弁が存在する。花卉中央に稜線を表現する、いわゆる朝鮮半島新羅系の瓦である。同様の瓦は向原寺の全身であり、蘇我馬子の建立になる豊浦寺（7 世紀初頭創建）の発掘調査でも多く出土しており、裏面に記された採集地が確かであることがわかる。本作の年代は豊浦寺の創建にやや遅れる 7 世紀前半（620 年代）に比定される。

・南都八景和歌巻



江戸時代以降、各所図会や絵図等にはその地域の名所旧跡等を八つ選んだいわゆる「八景」が紹介され、著名なものとして近江八景や金沢八景等がある。本巻は、東大寺や春日社を中心とした南都八景（佐保川の蜩、東大寺の鐘、三笠山の雪、春日野の鹿、南円堂の藤、猿沢池の月、雲井坂の雨、轟橋の旅人）を伸びやかな雰囲気描出している。制作年代については挿絵の筆致等から概ね近代頃と考えられる。

・大和絵師和田貫水 粉本



大和絵師・和田貫水が制作した粉本（約 500 枚）である。和田貫水は慶応 3（1876）年に大阪府東成郡生駒町で生まれ、冷泉為恭の門人である和田薫、守住貫魚に師事し大和絵を学んだ大和絵師で、明治 28（1895）年に第四回京都勸業博覧会に出品後、宮内省御用となり、同 30（1897）年には春日大社（当時は宮幣大社春日神社）より「春日右方絵（画）所預」に補任されている。正当な大和絵を伝統とする春日絵所に属した和田貫水の作は春日大社などに所蔵されるが、本品のような粉本の実例はきわめて珍しい。かつ、本品は箱書きにより和田家に伝来したことが明らかである点も貴重である。粉本には風景、人物など様々な図像が描かれており、今後、和田貫水、奈良絵を研究するうえで重要な資料となることは疑いない。

・松喰鶴蒔絵散米衝重



衝重は、祭祀などの際に食物を盛る膳の一種で衝重と呼ばれる。甲板には朱漆、側面には黒漆地に松喰鶴の金蒔絵が施され、松喰鶴の表現などから江戸時代以降の制作と考えられる。春日大社には技法や形式が近似した衝重が伝来しており、この衝重も元は春日大社に伝来したものであろう。

・春日大社大丸盆



丸盆は際しの際の祭器具として用いられ、春日大社では春日神への神饌を丸盆に載せ、これを神職が神前に献上する。本資料は形式から江戸時代以降の制作と考えられ、甲板には朱漆、側面と脚部には黒漆を施す。また、甲板には神饌などを置いた痕跡が認められることから、神事で実際に使用されたものであろう。形式が近似する大丸盆が春日大社に伝来していることから本資料も春日大社伝来と考えられる。

・奈良晒



奈良晒は奈良を代表する伝統的な織機である大和機で織られたもので、現在は専門業者が存在せず、一般的な購入経路がない。そのため、歴史的価値を持つ資料の一種として扱われるなど、非常に入手が困難な状況となっている。なお、奈良県下では奈良晒が資料として所蔵されている大学は本学のみである。

・法起寺・素弁蓮華文軒丸瓦



奈良県生駒郡斑鳩町法起寺から出土した素弁蓮華文軒丸瓦である。花卉数は8弁で、中房に花卉先端が尖る。こうした特徴の瓦は同じ斑鳩地域の中宮寺の瓦などにもみられる。年代は飛鳥時代前半の7世紀前半期に比定することができる。

・大官大寺・均整唐草文軒平瓦



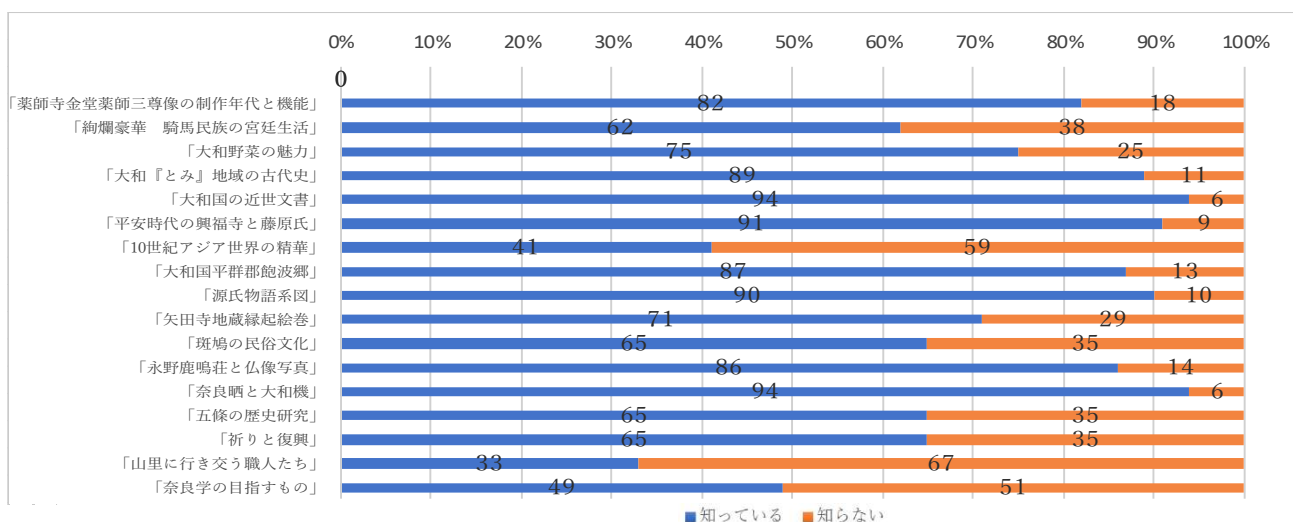
奈良県明日香村小山に所在する大官大寺跡で収集された均整唐草文軒平瓦である。ほぼ完全な形で遺存しており、文様部分には中心の花飾りから左右に派生する唐草文や上区の算盤玉状の珠文や下区の鋸歯状の表現が明瞭に残っている。また、瓦の製作者が示すとみられる「大石」の文字も、焼成前にヘラによって刻まれており、貴重である。大官大寺は奈良・大安寺の前身であり、そのルーツは舒明天皇が建立した百済大寺に遡る官立寺院である。大官大寺跡の発掘調査では本例と同じ瓦が多く出土しており、最終地点（大和大官大寺の墨書）が確かなことを示している。製作年代は大官大寺が建立された飛鳥時代末（7世紀末葉～8世紀初頭）に比定することができる。

■ブランディング戦略の指標

本学は、地域の拠点大学として、奈良県全体を研究のフィールドとする「奈良まるごとキャンパス」を商標登録し、特色ある研究を展開してきた。また本学独自の「奈良学」研究の推進拠点として、奈良学総合文化研究所を大学付置の研究機関として設置し、学内に設立した奈良学学会による学術誌『奈良学研究』を毎年刊行してきた。「奈良学」に関する研究成果は、附属博物館における特別展示、出開帳や市民大学講座、奈良学総合文化研究所による公開講座等を通して行っている。本学独自の「奈良学」研究は、その対象地域を奈良県内に止まらず、近畿圏から東京、東アジアへと展開している。これらの実績を踏まえ、「奈良学」研究を通して取組んできた大学のブランディング戦略の達成度を測るための指標を、本事業では、ステークホルダー別に設定した(枠内の達成目標は本事業申請時のもの)。

・【地域住民】「奈良学」の認知度

公開講座アンケートによる「奈良学」の認知度
達成目標 **80%**



平成30年度および令和元年度の全17講座について、アンケートを実施した。「奈良学の帝塚山大学」の認知度は、最高で**94%**に達した。

・【地域住民】公開講座参加者数・附属博物館来場者数

参加者・来館者数 採択前年度比 達成目標 **20%増**

平成28年度入館者数5,668名(基準来場者数)に対して、平成30年度は10,832名(**約90%増**)、令和元年度は、コロナ禍の影響を受けたが、9,062名(**約60%増**)が参加、入館した。

・【自治体】自治体との協定数

自治体との協定数 達成目標 **6件 → 10件**

奈良県生駒郡三郷町との包括連携協定を新たに締結し協定数は**7件**となった。

なお、連携協定の「奥大和地域」を個々にカウントした場合は**13件**となる。

・【在学生・保護者】在学生の実学プロジェクト参加率

平成28年度、在学生の実学プロジェクト参加率31.9%(基準参加率)に対して、令和元年度は、3606名の在学生が実学プロジェクトに延べ3812名(**105.7%**)参加した。

在学生の実学プロジェクト参加率
達成目標 **32% → 80%**

まとめ（外部評価委員の講評と今後の方針）

【外部評価委員】

・奈良の研究のベースを作ってこられたと思う。個人的には、学生がどこまで参加したかということに興味がありますが、それもやってこられたと思う。東京でも展示をされていて、この事業によって、アンカーみたいなものが打てたのではないかと。今まで「奈良学」とは何かというものがありませんでしたが、それを帝塚山大学が作ってしまったと言える。

・この事業の最初の段階から「地域・コミュニティー」に入り込んで研究されているイメージがあった。この事業によって、大学の先生方がそれぞれお持ちの「地域・コミュニティー」が繋がっている印象を受けた。さらに、地域の方と学生が一緒になって取り組んでいる事例が非常に多く、面白くなってきたという感想である。

・奈良県全域が研究対象であることを、地域単位の表現方法として、前面に押し出していただきかった。また、奈良時代から現在にかけての都市地域（奈良北西部）を今の「奈良学」がどう捉えているのかというのが若干薄いように思う。特に昭和の戦後以降の都市地域（帝塚山大学付近）についての研究が少し弱いように感じる。

・大学を卒業しても学び続けるという意味合いから、様々なプロジェクトで卒業生との繋がりを意識されているのはよく分かったが、次の展開として、奈良の特色を生かした活動をされている方との繋がりを強固にされることを期待している。

・「実学」という言葉がとても印象的だったが、卒業生はもちろんのこと、昔からある学部から新しい学部まですべてを巻き込んでやってこられた。これからは大学の個性をもっと出していかないとけない時代だと思うが、帝塚山大学の個性が見せられた取組であったと思う。

・アウトカムはどう考えるか。地域の課題を解決できるのは地域で育った人間だと思う。そういった中で、奈良出身の学生が増えてきたとか、奈良県外から来た学生が卒業しても奈良に住むついたりとかの学生のアウトカムについて別の見方をする必要もあるのではないでしょうか。

・大学というところは社会を鳥の目で見ることが出来る場所である。最大のアウトカムは、地域のリーダーとなってくれる人の数だと思う。そういう人材を輩出してくれる大学が理想である。

【大学】

・大学として「奈良学」をどう考えるかというのは、研究だけでなく、大学での捉え方というのとも考えなくてはならない。大学は奈良にあり、そのブランドを活用しながら、世界に向けての発信と取り込み（受信）をする必要がある。そういう意味では、この事業によって多少推進できたと思っている。もう一つは、学生を鍛える「実学」という言葉であるが、これは社会に出ても役に立つという意味合いに尽きると思う。ただ、この社会というのは、今の社会ではなく、学生が卒業していく将来の社会が対象となり、そこに必要なものは「実学」の中で見つけていくことになる。社会では、「現実的な課題を見る目」と「自分で判断できる力」が求められる。この事業の取組に参加した学生は、その力が非常にのびていると思う（アクティブラーニング）。それがまさに「実学の帝塚山大学」であるが、今後も「奈良学」はもちろんのこと、様々な分野において、成功体験をどうやって積み重ねていくかを引き続き検討していきたい。

（令和2年3月14日「外部評価委員会」より抜粋）

平成 29 年度 文部科学省 私立大学研究ブランディング事業
「帝塚山プラットフォーム」の構築による
学際的「奈良学」研究の推進

実績報告書

(平成 29 年度～令和元年度)

令和 2 年 3 月 31 日発行

発行者：帝塚山大学奈良学研究推進室

〒631-8501 奈良市帝塚山 7-1-1

<http://www.tezukayama-u.ac.jp/>



学校法人帝塚山学園